



「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局 〒235-0041横浜市磯子区栗木1-22-3/TEL 045-774-9861洋光台
バプテスト教会内(蛭川明男牧師) / ●世話人代表 金子 敬
●事務局長 吉高 叶(栗ヶ沢バプテスト教会TEL 047-341-9459)

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

巻頭言

小林孝男

こばやしただかお

学校法人 尚綱学院 宗教主任
赦されざる者を赦す奇跡

11月に、NHK衛星放送「“償い”の家造り～ルワンダ・集団殺戮からの模索～」を胸が絞めつけられるような思いで見た。最も印象に残ったこと、そしてショックだったことは、集団殺戮の被害者も加害者も文字通り「お隣さん同士」であるという点だ。塩や水を都合し合うご近所付き合いの中で残虐な出来事が起こったのだ。「ピアノの音がうるさい」「お宅の庭の落ち葉がわが家の樋に詰まって困る」等、ちょっとしたことでお隣同志がトラブルを起こし、わだかまりがいつまでも残ってしまうことがある。まして、殺した側、殺された側がお隣同士、同じ集落の人間だったとしたらどうであろう。耐えられたものではない。同じ空気を吸っていることすら厭うのではないだろうか。和解など想像外のことであろう。いつまでも憎み憎まれの関係を保ちながら、できるだけ遠く距離をとり、可能だけ接触をゼロに近づけて暮らす以外に、苦悩からの逃げ場はない。それがかりそめの逃げ場でしかないこと知りつつもである。

ところがルワンダでは今、被害者と加害者の和解が真正面から取り組まれている。夫を、わが子を、親を、兄弟を目の

前で殺され、自らも辱めを受けた女性が、加害者の男性を赦す心に変えられていくとすれば、それはもはや奇跡でしかない。その奇跡がひとつまたひとつと起きているのである。神はその奇跡を起こすために、多くの人たちの働きや労苦や祈りや涙や汗や捧げ物を用いてくださっているのである。赦されざる者が赦されるというとてつもない奇跡が、イエス・キリストの十字架において既に実現している。主の十字架を見上げつつ歩む私たち、和解の恵みによって生かされている私たちは、和解をもたらす勤めを、恵みとして主から与えられているのである。

家族の絆や部族の絆は強く美しいものである。しかし自分の家族や部族内という狭さを持つ。「誰でも、わたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟、姉妹、また母である。」(マタイ12:50)とイエスは語られた。神がすべての人々を掛け替えのない者として愛しておられることを信じ、自らもその愛に応えて生きようとする者にとっては、すべての者が神の家族である。神の家族としての絆の大切さを、ルワンダで、そして日本で語り続けていこう。

佐々木和之

ささきかずゆき

新たな交わりを手に入れて

念願の家を手に入れることだけでなく、ご近所との関係が好転し、新しい交わりを手に入れて喜び受益者たちの笑顔こそが、励ましであり希望です。

■「“償い”と“赦し”の家造り」を観て

皆さん、お元気でお過ごしですか？

ご存じの方も多いと思いますが、皆さんからのご支援金を用いて取り組んできた「償いのプロジェクト」（労働奉仕刑を宣告された虐殺加害者が、セミナー等を通して謝罪の思いを深めつつ、被害者側の家族のために取り組む家造り）のドキュメンタリー「“償い”と“赦し”の家造り—ルワンダ大虐殺からの模索—」が、昨年11月27日を皮切りに、NHKのBS1で計4回放映されました。

ルワンダ大虐殺後の和解をテーマにしたドキュメンタリーは、これまで何本か作られてきましたが、直接の被害者と加害者の葛藤が、彼・彼女等の言葉、表情、触れ合いを通して描かれていたという点ではあまり例がなく、画期的な作品であると思います。英語版の制作も決定しました。修復的正義による和解の取り組みが、英語圏の国々でも紹介されることを嬉しく思います。約1ヶ月に亘り、ある時は夜明け前から、ある時は炎天下の中、毎日家造りの現場に密着して番組を作られたスタッフの皆さん、ご苦労様でした。

冒頭の大虐殺や犠牲者の亡骸の映像、そしてその後、被害者と加害者が同じ空間に存在し、かつ様々な困難・葛藤を経ながらも和解に向けて歩んでいるという事実の衝撃が強すぎるためか、番組を見終わった直後には言葉が出ませんでした。頭では理解できても「心がついていけない」感じと言ったら良いのでしょうか。高校時代の友人が、「本当に赦せるのかな」という思いと、逆に、赦してしまって良

いのかなという思いの両方が残りましたが、あれだけの経験を経た後に「なぜ赦しなのか？」という問いが多く視聴者には残ったのではないのでしょうか。

日本であれば、加害者の顔など見ないように努めるでしょうし、恐らくそれがある程度は可能でしょう。しかし、ルワンダでは、人口の大多数が被害者側か加害者側か、もしくはその両方の立場にある人々なのです。しかも、人口稠密な小国ルワンダでは、大多数の人々が農民として土地に根ざして生きています。被害者側の人達と加害者側の人達が棲み分けることは事実上不可能です。同じ場所で生きていかざるを得ないのです。しかし、憎しみを抱きながら、同じ場所で生きていくのは苦しすぎます。でもそう簡単に憎しみが癒えるはずありません。そのような抜き差しならない状況の中で、「赦しと和解の道」を主体的に選び取る人々が出てきていること。それは、まさに奇跡と言えることかもしれません。しかし、そこにしか生き延びていく道が無いと感じている人々も少なくないのです。とは言え、その赦しと和解という選択は、深い苦悩を伴うものです。番組に登場した被害者の女性達は、15年間近くの壮絶な「和解への旅」を歩んできた方々です。例えば、体中を鉋で斬りつけられたアルフォンシンさんが、「赦す」という決断に至るまでにどれほどの苦悩があったのか、そして、その決断をした後にもどれだけの葛藤を経て今日に至っているかについて、もう少し踏み込んで描いて欲し

かったという気がしないでもありません。そして、「なぜ赦しなのか？」という問いに答えるため、どうしても触れざるをえない彼女の信仰についても。

ディレクターのお話では、最初75分程度に編集されたものを、泣く泣く49分にカットしたということでしたので（その作業の困難さを、試合に臨む前のボクサーの減量に喩えておられました）、これだけ深く複雑なテーマを短時間で描ききることも自体が不可能だったのかもしれませんが。しかし、残り二人の被害者女性が登場する場面では、加害者による家造りが進む中での被害者の葛藤が見事に描かれていたと感じました。

また番組は、プロジェクトが直面する困難な課題、さらには、大虐殺後の和解の取り組みそのものが孕んでいる問題を浮き彫りにしていたと思います。その一つは、赦すことを被害者に強いてしまうことの危険性です。番組の終わり近くにジャクリーヌさん（夫、子ども、妹らの親しい者達を殺され、いくつかの現場を目撃してしまった女性）が語られた、「赦せない自分が罪人のように思える」という言葉に胸が痛くなりました。

赦せなくて当然の仕打ちを受けた被害者を更に苦しめ、「赦せない自分が罪人のように思える」とまで言わせているものは何なのでしょう？ 私はそこに、教会において、赦しがあたかも「義務」であるかのように語られてしまっている現実があるのだと思います。確かに、聖書には人間同士の赦しを義務として語られているように解釈され得るイエス・キリストの言葉が記されています。しかし、信仰者として赦しを語る時に強調されるべきことは、むしろ神様の「恵み」として、「赦す心」が与えられるということではないのでしょうか。私はキリスト者として、赦しは人と人の和解のために働いてくださるキリストが、最も良い時に「恵み」として差し出して下さるものなのだと考えています。しかし、その恵み

を実際に受け取るかどうかは、私達人間の決断に委ねられているのだと思うのです。この問題は、REACHのスタッフ達とも何度か議論してきました。そして、REACHのセミナーで、赦しが義務として語られることは無くなりました。しかし、これからもこの問題と闘っていかねばならないことを思わされたのでした。

また、赦しと和解が国家によって「国民の義務」として語られているという問題もあります。「国家政策の根幹として和解を掲げている以上、国民はそれに向けて努力しなければならない」という、上からの赦しと和解の論理です。（この問題については、いずれ時を改めて議論したいと思います。）国家であれ教会であれ、決して赦しを被害者に上から強いることがあってはならないと思います。



<ジャクリーヌさん親子>

もう一つ番組で浮き彫りになったことは、家造りが虐殺被害者にとっては癒しと生活再建のため、直接の加害者にとっては償いとして意味のあることとは言え、それが妬みを生み、村人達の間新たな亀裂を作り得るということです。もちろん、私達はその危険性に注意を払いつつ働きを進めています。しかし、様々な制約によって、私達が思う通りに物事を進められないのも事実です。例えば、プロジェクトを計画した当初は、より小さく質素な家を建設する予定でした。しかし、政府の虐殺生存者（genocide survivor）支援事業が設定する基準を満たさない建

設は認められないという理由で、より立派な家を造るように要求されたのでした（と言っても14坪の家ですが）。REACHの通常のプロジェクトでは、虐殺生存者だけを特別扱いすることはありません。むしろ、様々な立場の人々が一緒に参加する活動を支援しています。しかし「償いのプロジェクト」に関しては、修復的正義（8号3頁）による和解を目指すという主旨から、どうしても受益者の多くが虐殺生存者にならざるを得ないのです。

私達が、限られた資金を用いて支援できる人達は決して多くはありません。もちろん、選定基準を地域の人達と話し合い、彼・彼女らの意見に基づいて最も適切な受益者を選んできたわけですが、「なぜ私でなくてあの人なのか？」という思いを抱く人達がいっても不思議ではありません。そういう意味で、この妬みの問題は「償いのプロジェクト」に限らず支援の対象として特定の人々を選び出すという行為に付随した問題だといえるかもしれません。この様に私達の活動は和解という「善」のためでありながら、新たな亀裂という「悪」を生み出しかねない矛盾を孕んだものであることを自覚しつつ、最善を尽くしていかねばなりません。ただ私自身が救われた思いになるのは、家を建ててもらった受益者の中に、その家を「神様からの贈り物」として理解し、身寄りのない子ども達を引き取ったり隣人をもてなす人々が生まれていることです（11号6頁）。私は、そのような愛の行為こそが、妬みを持つ人々の心を溶かしていくのだと思っています。

■好意のキャッチボール

番組に登場したマリアさんも、近隣の人々との関係が以前からギクシャクしていた上に、家造りが始まったことで妬まれ、とても苦しんでいました。面と向って「完成前に、きっとおまえは死ぬだろうよ」とまで言われたことがありました。しかし、彼女は、家の完成祝いとして、

生まれて初めて近所の人達を自宅でもてなしました。それが奏功したのでしょうか、先日現場を訪ねた時、彼女と近所の人達の関係が好転していることが分かりました。彼女が催した新築祝いのもてなしに応え、完成した家がさらに丈夫になるように、外壁にセメントを吹き付ける費用をお祝い金として近所の人達が負担してくれたのでした。

その後も両者の間の好意のキャッチボールが続いています。私が最近彼女の自宅を訪ねたとき、彼女は留守でしたが、ひとつのことに気付きました。以前彼女が住み、今は倉庫として使われている小屋の戸口が開け放たれ、中には畑で獲れたインゲン豆が山積みになっていたのです。「以前だったら、すぐ盗まれて空っぽになってしまうところだよ」と、プロジェクト調整員のオーグスティンさんが教えてくれました。家の前の以前空き地だった所は、今花園のようになり、家の周りにも可愛い花が几帳面に植えられていました。私は、その花を眺めながら、念願の家を手に入れたことだけでなく、ご近所との関係が好転してきたことで喜んでいるマリアさんの満面の笑顔を思い浮かべました。



＜自宅を前に、マリアさんと近所の子どもたち＞

■第1期完了に向けて

現在、プロジェクト第1期の完了に向けて残り3軒の建設を進めています。これまで、政府の政策転換の影響を受け、一時中断に追い込まれるなど、いろいろ

と紆余曲折を経てきましたが、計画していた25軒全てを建設できることになりました。

現在の住居現場は、受刑者が収容されているキャンプから遠いため、既に刑期を終えたプロジェクト経験者からなる大工チームに担当してもらっています。そのリーダー役を務めてくれているのは、私達が信頼を寄せてきたエリアブさんです。（番組にも明るいキャラで登場していました。詳細は「支援する会」ホームページの和之ブログ11月29日付参照。）現在進行している家造りは、作業の量に応じた報酬をこちらで支払うため、加害者による「償い」という意味合いは薄れます。しかし、刑期満了後も心を込めて家造りを続ける彼等と被害者側の人達との更なる関係強化に繋がることを期待しています。

■今後の予定

これからプロジェクト第1期の評価に向けて動き出します。このプロジェクトが、受益者である被害者、家造りに参加した加害者、そして、それぞれの家族を含む村の人々の心理や関係性に与えた影響とともに、改善点を明らかにしたいと思います。

以前お伝えしたように、このプロジェクトの目的は、虐殺加害者の地域社会への再統合(social reintegration)、被害者の生活再建、そして、両者を含む地域住民の関係修復に良い影響を与え得る労働奉仕刑のモデルを打ち出し広めていくことです。これまでの実施内容を評価した後、ルワンダ政府との協議の末、第2期の実施内容を決定することになります。今後は、キレヘ郡でのプロジェクトの継続とともに、政府へのロビー活動、平和と和解のために働く他のNGOとの経験の分かち合い、そして、他団体によっても「償いのプロジェクト」のモデルが取り入れられていくように働きかけていくこととなります。

これまで監督官庁は、受刑者がキャンプと公益事業の現場を往復するだけで、地域の人々と触れ合うことがない労働奉仕刑を推進してきているため、そう簡単に私達の目的が達成されるとは思えません。しかし、明るい材料が無いわけではありません。先日協議をした政府の国民統合・和解委員会の担当者も、現行の労働奉仕刑が、「受刑者の社会への再統合」と「和解の醸成」という本来の目的を果たしていないという、私達と同じ認識を持っていることが分かりました。今後は、この委員会とも協力しつつ、労働奉仕刑の監督官庁への働きかけを強めていきたいと考えています。

これからが正念場です。どうか引き続き、お祈りとご支援をよろしくお願い致します。

■活動ハイライト

REACHのその他の活動のハイライトをお伝えします。

★サッカーを通しての平和構築

カヨンザ郡で青少年を対象に実施しているスポーツ及び文化活動を通しての平和構築プロジェクト。日本国際飢餓対策機構からの支援を受けて、サッカー場の建設を進めてきました。つい先日、芝を植える作業が完了。7月には、芝がしっかり生えそろい、試合が出来るようになるとのことです。これで、毎年恒例になった青少年のサッカートーナメントに弾みがつくことでしょう。

★ 平和と和解CDプロジェクト第2弾！

皆さんもご存知のウルリミ・ルブムエ合唱団（団員数30名）のCD製作プロジェクトの第2弾が始動。合唱団は、CD第1弾のこれまでの収益約50万円の一部を、キーボードの購入費、集中トレーニングのために招聘した指導者への謝礼等にあて、現在も新たに作詞・作曲した平和と和解メッセージソングの練習に励んでいます。

今年の11月までに、第2弾の完成を目指しています。



<練習の後に>

★ 平和構築研修センター

長年の念願であった、平和構築に関する宿泊施設付研修施設、平和構築研修センター（正式名称は、Centre for Unity and Peacebuilding）の建設が昨年12月に始まり、その後順調に進んでいます。建設は業者に請け負ってもらっているの

ですが、REACH代表のカリサさん自ら、毎日現場に出て監督にあたっています。REACHスタッフ一同、このセンターを拠点にして、更に癒しと和解、紛争解決、平和構築の研修プログラムを充実させたいと意気込んでいます。



<REACHのカリサさん（左）と
フィデルさん（右）>

孤児院訪問記

佐々木 恵

ささき めぐみ

経済発展の陰には、愛を待ち、愛を求めるたくさん子ども達があります。抱いて微笑みかけることから、ふれあいを始めたいと思っています。

先日、友人に誘われてキガリ市内にある孤児院に行ってきました。生まれたばかりの赤ちゃんから3歳位までの子どもたちが130人ほどでしょうか、きれいなレンガ造りの建物の中で生活していました。私達が面会を許されたのは2歳から3歳位までの子どもたち50人ほどでした。コンクリート床の作業場のような場所で、テーブルに向かってくっつきあうようにして座っていました。そして、その子ども達をたった一人の若い女性が世話していました。一人一人の世話に手が回るはずもないのでしょうか。座った長いすは、あれよあれよと言う間におもろしが広が

って行き、コンクリートの床に垂れて行きます。持っていった折り紙の指人形を子どもたちにあげたのですが、それも遊んでいるうちにびしょびしょになってしまいました。濡れたいすや床を拭くでもなく、子ども達の服はすぐにぐっしょりになってしまいます。その濡れた服を着替えさせてはいるのですが、ほんの一時しのぎに過ぎません。食事の用意ができる50人の子ども達は汚れた手を一つのバケツに突っ込んで洗うのです。食事はしっかりしたものでした。しかしそのうちテーブルの上を歩き出す子、おかずのジャガイモを投げる子も出てきます。10人

ほどの子どもは床に座って食べています。そして、皿から床にこぼれたおかずをそのまま口に入れて食べてしまうのです。

私はこの現状を見てとても胸が痛くなってしまいました。これらの子ども達がどこから来るのか尋ねると、案内の人は「ポリスが連れてくるのです」と言いました。未婚の母から生まれた子、母親が病気で死んでしまった子、捨てられてしまった子、その他いろんな理由で育てる人がなくなった子ども達でしょう。これらの子ども達がここで育てられているのです。子どもたちは、個人的なふれあいを求めています。折り紙の指人形をただ指に突っ込む、それを自分でするのではなく、してもらいたいのです。ご飯を自分で食べるのではなく、食べさせてほしいのです。抱っこしてほしい、遊んでほしいのです。子ども達が求めているのはそのことでした。この子達には、今まさに愛そのものがが必要です。

限られた資金と人手では十分なことはできませんし、手をつけられないような現実があまりにも多すぎます。その現実の中で、それでもできることからこの孤児院は始めているのでしょう。

ルワンダは15年前のジェノサイド以降、都市部はめざましい発展を遂げています。そしてその事は、ルワンダの誇るところでもあります。キガリ市の中心部に増え続けるビル、たち並ぶ豪邸、手入れされた中央分離帯が印象的な幹線道路には、ちり一つ落ちていません。私が住み始めた3年前と比べても、しゃれたコーヒショップやケニア資本の大手スーパーが開店し、物価の急騰といった問題はあるものの、外国人の私には生活し易くなりました。しかしその発展の陰でまだまだその恩恵の届かない部分が、ひっそりと、しかししっかりと存在するのです。どここの国でもいつも隅に追いやられるのは、この孤児院が代表するような身寄りのない人達や貧しい人達なのでしょう。今回はその追いやられた影の部分と見

せつけられました。この子達のことを考えると本当に心が重くなります。十分な愛情を必要とする時期に、ただ生れ落ちたところが違ったというだけで、この子達に与えられた環境はあまりにも厳しいものだからです。

ところで、ルワンダ人の中には、身寄りのない子どもを、貧しい中でも自分の家族に迎え入れて面倒を見る人達がとても多く、このことは私達の学ぶべき姿です。また、宣教師の家族が、この様な子ども達を養子にするケースもたくさん目にしてきました。この問題を解決するための行政の取り組みは当然必要ですが、彼らは、自分の生活自体を開放し、自身の生き方を通して愛を実践しているのです。私にはそのような生き方を選びきれず自分の子どもたちを育てるだけで手一杯に思えます。週に一回の訪問で何が変わるとも思いませんが、私は、今日出会った子ども達に対してだけでもこのまま知らんぷりはできないと感じました。一人でも多くの子どもを抱いて微笑みかけ、声をかけ一緒に遊んであげる…。そうしたことから始めてみようかと友達と話しているところです。今度は、おもしろ対策にバケツと雑巾を持って行くつもりです。

●家族の近況●

萌：ケニアで勉強とスポーツに忙しい毎日を送っています。

仁：バスケットボールのリーグ戦に学校代表として出場中。

共喜：この頃、背丈が大分高くなってきました。

恵：週に1度のヨガ効果か、50肩が快方に向っています。

和之：昨年末に生まれた3匹の子猫たちに癒されています。

どうぞお祈りください。

事務局からお知らせ

- CDのご購入を通してルワンダの青少年平和構築活動にご協力下さい！

ウルムリ・ルブムエ合唱団

平和と和解メッセージソング CD第1弾

「我らはひとつ」(1枚2千円)



収益金は、カヨンザ郡の青少年のスポーツ・文化交流活動のために用いられます。お問い合わせは、日本バプテスト連盟宣教部 国外伝道室・丁野雅子さんまで。
電話：048-883-1091 電子メール：chouno@bapren.jp

- REACHの活動を紹介したDVDをお求めいただけます。学校や教会等でも是非ご紹介下さい。文部科学省選定・ルワンダ大使館推薦

「平和への道～いやしと和解を通して」時間：19分／2009年1月制作

頒布価格：1000円(税込・送料別)

問い合わせ：日本国際飢餓対策機構 電話：03-3383-7611

右記のWEBサイトからも注文可 (<http://jifh.org/world/dvd/dvd.html#dvd3>)

新たに支援をくださった方々です。感謝致します。

(’08年11月1日～’09年2月15日)

田辺広美、宇佐美廣子、壱岐キリスト教会、粕谷バプテスト教会、白水千代、永沼協子、玉舎朋子、鳥飼好男、武田綾乃、山口陽子、全国友の会中央部、石井崇之、玉作裕美、穴井曜子、藤田直彦、小牧由香、敬愛幼稚園バザー係り、吉泉里美、川越キリスト教会、坂庭正通、杉谷裕通、林 優司
(以上 受付日付順)

- 事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。請求ではありませんのでご了承ください。必要な方はご利用ください。

●郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会●

- 佐々木さんを支援する会HP (ホームページ)

<http://rwanda-wakai.net/>

佐々木さんの活動報告、写真館、等。

HPから入会手続きも可能です。

佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新しています。

- 世話人会 金子 敬(古賀教会牧師)、蛭川明男(洋光台教会牧師)、村上千代(日本バプテスト女性連合幹事)、吉高 叶(栗ヶ沢教会牧師)